

パルシステム東京御中

## 「平和カンパ2025年度」ご寄付の御礼と活動のご報告

特定非営利活動法人 難民を助ける会 (AAR Japan)



AARの支援でスバイリエン州の小学校に通う知的障がいのある児童（最後列右）。現在は休むことなく通学し学校生活を楽しんでいると話してくれました（2025年8月21日）

日ごろより多大なるご支援をいただき、心より御礼申し上げます。貴組合員の皆さまのご支援のおかげで、2025年度もカンボジアで障がいのある子もない子も、ともに学べる環境づくりを進めることができました。心からの感謝とともに、下記の通りご報告させていただきます。

### 記

#### ■事業概要

**事業地:**カンボジア王国 カンダール州 クサイ・カンダール郡、アレイクサット市 スバイリエン州  
**支援事業:**障がいのある子どもを含むインクルーシブ教育推進事業

**受益者:**クサイ・カンダール郡およびアレイクサット市の小学校教員 39名、教育行政職員 2名、クサイ・カンダール郡の特別支援教育担当の教員 9名、障がいのある子ども 15名



## ■ 事業背景

カンボジアでは、障がいのある子どもたちの中に、学びたい気持ちがあっても学校に通い続けることが難しい子どもが少なくありません。校舎やトイレの使いにくさ、子ども一人ひとりに合った関わり方を学ぶ機会の少なさ、地域に残る偏見や思い込みなど、学びを妨げる壁はさまざまです。

AARは、障がいの有無にかかわらず、誰もが地域の学校でともに学べる「インクルーシブ教育（Inclusive Education、以下IE）」を大切に、学校、家庭、地域、行政と丁寧に連携しながら取り組んできました。これまで育んできたつながりを土台に、地域の人びとが主体的に子どもたちを支える体制づくりをより重視し、活動を進めました。

## ■ 事業目標

対象地域の教育コーディネーター（Education Coordinator、以下EC）や教育行政職員が主体となる、障がい児を地域全体で支え続ける持続発展性の高いIE推進体制の構築・強化<sup>1</sup>。

## ■ 事業成果

- 好事例の視察、IEチェックリスト研修、定例会を通じて、ECのIE推進に関する能力が強化されるとともに、関係者間の協力関係も強化されました。
- ECが活動する地域における障がい児の平均通学者数は全国平均を上回っており、対象地域が障がい包摂的な地域へと発展しつつあることが示唆されました。
- スバイリエン州において、IE推進の中核を担う人材が育成されました。
- 障がい児が抱える個別の課題や困難の一部が解消されました。

## ■ 活動概要

1. 教員間の学び合いの仕組みづくり
2. 地方でのIEチェックリスト研修の実施
3. 個別支援

## ■ 各活動のご報告

### 教員間の学び合いの仕組みづくり

AARは教育行政機関と協働し、カンダール州クサイ・カンダール郡およびアレイクサット市の一部地域において、初等教育機関の職員・教員間の学び合いを促進する役割を担うECを、各小学校に1名ずつ配置しています。ECには、対象地域の教育関係者が主体となり、地域全体でIE推進に取り組む持続可能性の高い仕組みを構築するうえで、中核的な役割を果たすことが期待されています。

---

<sup>1</sup> 計画では「IE推進体制を強化する」としていましたが、事業途中でこれまでIE推進事業を実施していなかった地域での活動を実施することとなったため、「IE推進体制の構築・強化」と変更しました。

## 1) EC 定例会

本助成金では、ECの定例会開催を支援しました。定例会には、クサイ・カンダール郡およびアレクサット市の小学校教員のEC39名、特別支援教育担当（Special Education、以下SE）2名、クサイ・カンダール郡教育行政職員2名、アレクサット市行政職員2名が参加しました。

2025年12月に実施された定例会では、39校の小学校の通常学級に通う障がいのある児童数が165名と報告されました。1校あたり4.2名という数値は、カンボジアの推定平均値である1校あたり2名（た

だし、小中学校を合わせた1校あたりの数）を大きく上回っており、各学校において、障がいのある児童の受け入れが進んでいることがわかります。また、会合では、ECが各学校での取り組みや課題を共有し、それに対してSEの教員や他校のECが助言を行う様子が見られ、EC間の協力関係の強化が認められました。



ECとキリ小学校教員とで学校や学級運営について意見交換がなされました

## 2) 他地域からの学び



キリ小学校の授業では障がいのあるなしに関わらず児童が活発な発言をしていました（2025年6月26日）

2025年6月には、EC39名、SE4名およびクサイ・カンダール郡教育行政職員3名、アレクサット市行政職員3名、AAR職員4名の53名とともに、コンポンチュナン州にあるキリ小学校を視察しました。同校は、スタンダードスクールの承認を教育省から受けている学校であり<sup>2</sup>、教員間の連絡が他の学校よりも密になされ、事例を紹介した教材が豊富にあるほか、地域社会との連携などにも工夫がみられ、障がいのある児童を含む多くの児童がいきいきと学んでいる様子が印象的でした。移動に困難のある児童が校内で使えるよう車いすを常備したり、

黒板の文字を大きく書いたり、子どものニーズに合わせた対応も実施されていました。カンボジア国内における実践例から学ぶ意義は大きく、参加したECの活動意欲の向上にもつながる機会となりました。

## 3) EC マネジメントメンバー強化研修・EC メンバー強化研修

ECが各学校で一般教員に対する助言を行ったり、課題解決に向けて関係者をつなぎ、協議の場を設定したりするためには、EC自身の能力強化が不可欠です。そこで、2025年7月24、25日に、ECの指導的立場を担うSE9名およびクサイ・カンダール郡教育事務所職員2名、アレクサット市教育事務所職員1名を対象として、指導者研修を実施しました。研修では、AARが教育

<sup>2</sup> 学校を「より質が高く、公平で、説明責任のある学校」に改革するための全国的な枠組みとして、基準をクリアした学校をスタンダードスクールとして教育省が認定しています。認定された学校には、学校予算が追加されます。



クサイ・カンダール郡にある SE や郡教育事務所職員が IE チェックリストについて学習しました (2025 年 7 月 24 日)

省とともに開発した「IE チェックリスト」を用い、学校全体で IE を推進するための視点と方策について学ぶ機会としました。

その後、10 月 1 日に全 39 名の EC を対象に、IE チェックリストを用いた研修を実施しました。研修に参加した EC は各所属校に IE チェックリストを持ち帰り実践し、EC の定例会でその結果を共有することになりました。研修後、郡教育事務所職員からは、EC の理解度が想定以上に高かったとの感想が寄せられました。また、IE について理解を深めた EC が今後各学校でどのような実践を行っていくのか、郡教育事務所としてフォローアップを行い、支えていきたいとの意向も示されました。

長年 AAR が IE 推進事業の対象としてきたアレイクサット市には、近年の行政区画再編により事業対象外となった地域があります。こうした地域にも EC の仕組みを拡大するため、13 校の小学校に EC を 1 名ずつ配置し、1 月 22、23 日 (第 1 グループ)、1 月 29、30 日 (第 2 グループ) に IE 基礎研修および IE チェックリストを用いた実践的な研修を実施しました。これらの研修を通じて、アレイクサット市教育事務所職員からは、市全体として小学校における IE 推進体制を構築することができたとの手応えが示され、今後の展開への期待もうかがえました。



障がいのある児童にとって学校内にどのようなバリアが存在するかグループで検討し寸劇にて発表しました (2026 年 1 月 22 日)

## 2. 地方での IE チェックリスト研修の実施

AAR は、教育省とともに作成した「IE チェックリスト」を用い、これまで 11 州で教員研修を実施してきました。本研修は、IE 推進のためのマネジメント上の要点を理解するとともに、AAR が長年にわたりカンダール州で実践してきた IE 推進の成果や経験を踏まえた、より実践的な内容となっています。2025 年度は、プノンペンから約 120km 離れたスバイリエン州にて研修を実施しました。AAR は教育省職員とともに講師を務め、小学校職員 27 名、コンポンロウ郡教育事務所職員 2 名、州教育局職員 1 名を対象に、2 日間の座学 (障がいの基礎、合理的配慮について) と 1 日間の学校での実践を組み合わせ、計 3 日間の研修を行いました。



訪問先の小学校では建物にスロープが設置されていましたが、雨が降ると水たまりができ、車いすで移動しにくいことが確認されました (2025 年 8 月 21 日)

学校における IE チェックリストの実践では、トイレや手洗い場が、車いす利用者を含む誰もが使いやすい仕様になっていないことに気づく場面がありました。また、聴覚障がいや知的障がいの

ある児童の座席配置を工夫し、本人のニーズや特性に応じた授業実践を行っている小学校もみられました。本研修は、各校がすでに実施している取組を改めて認識し、その重要性を学校全体で確認する良い機会となりました。

### 3. 個別支援

AAR は、障がいのある児童生徒を対象に、地域の学校での学びを実現できるよう、一人ひとりのニーズに応じた支援を行っています。こうした個別支援は、心身の健康を維持するとともに、通常学校での学びを実現するうえで欠かせない活動です。

2025年4月からの1年間で、9名の障がいのある子どもに対して支援を行いました。対象となった子どもの家庭はいずれも貧困世帯として登録されています。カンボジアでは、政府が定めた基準に基づき、貧困世帯が特定されず、定期的な受診が必要であるにもかかわらず、カンボジア政府による無償診療サービスの範囲内では必要な薬剤が十分に処方されない



車いすの前輪が割れたためプノンペンにある車いす工房に修繕に訪れた児童とその母親。AARの支援により2024年に通学を開始し、現在もクサイ・カンダール郡の小学校で勉強を続けています（2025年7月10日）

場合があるほか、医療機関までの交通費に対する補助もなく、厳しい状況に置かれています。

このたびAARは、医師の処方に基づく薬剤購入費の一部補助、受診のためのトゥクトゥク（三輪タクシー）利用費の一部補助、また理学療法士の免許をもつスタッフによる生活介助指導を実施しました。さらに、眼鏡や補聴器の使用が有効と考えられる児童については、NGOを含む他機関を紹介したほか、支援の意向を有する民間企業と眼鏡の提供について協議も行いました。

あわせて、障がい分野を担当する地域行政官との協議の場を設け、公的支援によって障がい児の健康面および教育面のニーズに適切に対応できる体制の実現に向け、働きかけを継続しています。支援を具体的な制度や仕組みとして実現することは容易ではありませんが、関係するステークホルダーとともに解決策を模索し続けることが重要であると考えています。

#### ■ 研修や啓発活動参加者の声

**フオト・ソチェイ氏（スバイリエン州教育局職員）**

この度IEチェックリスト研修に参加し、学校のマネジメント、教室のマネジメントについて新たな視点を獲得することができ、とても価値のある時間となりました。州の教育行政官として、今後は州内での新たな学校建設の際には、トイレや建物のアクセシビリティを確保した構造

とすることを徹底させたいと思います。スバイリエン州で活動するNGOなど民間との協力関係も強化し、

地域に開かれたインクルーシブな学校を目指していきたいと思っています。



ソチェイ氏（右端 2025年8月19日）

ソウム・サオパン氏（アレイクサット市タジュン小学校、3年生担任）  
私は 36 年間の教員生活において、児童のニーズにあわせて教育を行ってきたつもりでした。しかし、この研修で、自分には「障がい児は特別なので個別に対応が必要」という認識があったことに気づかされました。障がい児が特別なのではなく、すべての子どもにそれぞれのニーズがあり、学校がそれに応じて変化していけるよう、学校全体、学級全体の取り組みとして教育を考え直したいと思います。そうした視点で、後輩の育成にも積極的に関わっていければ何よりです。



IE 基礎研修に参加した  
サオパン氏

#### ■ 今後に向けて

本事業により、EC を核とした教員間の学び合いの仕組み、IE チェックリストを活用した学校改善の視点、ならびに障がいのある子どもへの個別支援の実践が着実に進展しました。今後は、これらの成果を基盤として、ラタナキリ州での IE チェックリスト研修、モコンポル郡での EC の導入と学校間ネットワーク形成、さらに補助具・通学支援を含む個別ニーズへの対応へと発展させていきます。各地域の教育行政機関や学校、保護者、地域関係者との連携を一層強化し、障がいの有無にかかわらず、すべての子どもが地域の学校で学び続けられる包摂的な教育環境の整備を進めてまいります。



研修を楽しむ教員たち。インクルーシブ教育は教員（大人）が楽しみ意欲をもって進めることが何よりも重要です（2026年1月29日）